



海外旅行における結核症のリスクは？

半年ほど前に千葉県で集団感染した結核のニュースを聞いて、結核は、過去の病気ではないのかと疑問に思った人もいるでしょう。現実には、今でも日本で1日に50人の患者が発生し、5人が死亡している感染症です。海外へ行くときは新たなリスクは発生するのでしょうか？結核予防会結核研究所対策支援部長の太田正樹医学博士に話を伺いました。

●結核はどんな病気？

結核は結核菌という細菌によって起こる感染症です。多くの場合、肺結核の患者が咳をした時に発生する結核菌を含む飛沫核を吸い込むことにより感染します。しかし全員が発病するわけではありません。感染者の5～15%が結核症を発病すると考えられています。

●日本における実態

昨今、日本の結核患者数は減少し、2015年に診断された結核患者数は1万8280人、人口10万人当たり14.4人と、欧米先進国とかなり近い程度まで制御されつつあります。このため、日本では新たに結核に感染するリスクは高くありません。しかし患者数から見ると、日本で最大の感染症です。70～80歳以上の高齢者や結核高蔓延国出身の外国人、東京、大阪、名古屋の一部の都市部ではまだ結核患者が多く診断されています。

ちなみに、80歳以上の高齢者に感染

者の割合が高いのは、第二次大戦中及び戦後の日本では結核患者が多かったこと、また徴兵や疎開、復員などで、大規模な人口移動が起こったために、感染が拡大したと考えられています。

●海外旅行と結核

世界では、人口の3分の1が感染し、死亡原因となる感染症の第1位です。しかし、短期の海外旅行による結核感染リスクは、さほど高いとは考えられません。渡航地域、期間、あるいは現地の人たちとの接触の度合いにもよるので、一概には言えませんが、基本、観光地などを訪問する1週間～1ヵ月程度の海外旅行であれば、旅行中に食事を取らなくて低栄養になるようなことがない限り（ありそうもないですが）、発病のリスクが高くなるとは考えられません。

●予防するためには

他の感染症のように予防接種や予防薬を準備する必要はありません。また感染そのものを防ぐこと自体、極めて難しいです。しかし注意しなければいけないのは、結核高蔓延国への海外赴任などで長期（半年以上）に滞在し、現地の人々と生活する（同居、職場で毎日顔を会わせるなど）と、それなりにリスクは高くなります。このため、帰国後に胸部X線検査など、健康診断をお勧めします。小中学生で半年以上結核高蔓延国に滞在した場合、学校安全保健法により帰国後に精密検査を受けることが定められて

います。

●添乗員の肺結核発病も

昨今、添乗員が肺結核を発病し、その添乗員が同行したツアー客の健康診断を行った事例も複数報告されています。海外に出る機会が多い職業なので、1年に2回は、定期健康診断を受けることをお勧めします。

肺結核を発病した添乗員と旅を共にしたツアー客が健康診断を受けるのは、感染した危険性が高いと判断されるためです。感染と判断された場合、予防薬を6～9ヵ月服用することで、発病のリスクをかなり低減することができます。

結核症のほとんどは肺結核として発病します。肺結核を発病すると、概ね2～3週間以上継続して咳をするようになります。また痰に血が混じる場合もあります。このような時は必ず受診して症状を説明しましょう。

●結核高蔓延国

日本は、結核中蔓延国とされている国ですが、高蔓延国の定義は、患者数の多い上から20カ国と、患者割合が高い10カ国の計30カ国を選んでいきます。アジアとアフリカの国々が多く、日本人旅行者が多い国としては、中国、フィリピン、インドネシア、ベトナム、ネパールなどでしょう。詳しくは以下を参照してください。

<http://www.stoptb.org/countries/tbdata.asp>

挑戦の数だけ、 保険がある。

To Be a Good Company



東京海上日動

